

◎5C-12《いむぶろろあいずど大晦日いぐ》／大勢参加（90分）

今はなき吉祥寺《マイナー》で行われた同名のコンサートからの抜粋だが、このテープは実際の演奏群の断片をでたらめな順序に並べかえ、しかもクロス・フェードして切れ目なく再構成したものである。したがって、記録というよりは Netz造といった方がいんじゃないか、という識者の声をよそに「よくまあ、勝手なことをやる連中が一晚に20人近くも集まりましたね」「即興演奏は孤独な闘いなんだ！・・・なんちゃって」「そーなんです、サトーさん」「だからさあ、オレが言いたいのはねネー、即興にはさあ、いいものもあるけど、わるいものはないってことなんだよー！」等という参加者の声もある。コンサート終了語、吉祥寺北口サロンドをブカブカビービーと行進した模様もどっかに入っているが、どの演奏も甲乙つけがたいニギヤカサではある。1979年12月30日録音。

◎5C-13《N-O Duo》／中坪+オニック（90分）

このデュオの特徴は、全ての作品がLINEで録音されること／全て即興で演奏されること／一方が楽器を演奏するとき、もう一方はその楽器につないだエフェクターを操作する側に回ったり、あるいは一方のソロを録音したテープをもう一方が加工する、といったパターンをとること／等である。「お互いがブラック・ボックスとして作用すれば・・・」（オニック）1980年録音。

◎5C-14《重力と毛がはえた》／ムリョ11人参加（90分）

これも《マイナー》で行われた同名のコンサートからの抜粋。飛び入り参加の第五列即席トリオの他、白石・鈴木・風巻・竹田(以上ソロ)、ヤタスミ+大塚+河原+佐藤といった、《ピナコテカ》のスタア・プレイヤー達の演奏を収録。このテープを聴いてフリーチャズだと勘違いした人がいたが、困りましたね・・・チャズの人も困るでしょうが。コンサート主催者のヤタスミ氏はトカゲとカメを飼っているが、2匹いたトカゲの片方を1980年末に誤って死なせてしまったのはジョン・レノンの死にもまして本当にあった悲しい話である。1980年4月13日録音。

◎5C-15《Mobilities 1~8》／中坪清一（60分）

中坪のソロ・テープもこれで3本目になるが、この最新作は今までのうちで最もポップでオルタネイティヴでインダストリアルなものだ・・・なんて三流ロック評論家みたいなことを言ったりして。これは真面目なレビューである。・・・普段は歌謡曲を聴いているという彼が、自分の作品となるときわめて電氣的なインストゥルメンタルになるというのは面白い。クラウド・ジュルツ版「田舎のバス」を演るといった隠れたイタズラも試みているのだが、気付く人はほとんどいないだろう。1980年録音。

◎5C-16《ビニール解体工場》／デク（60分）

「ビニール解体工場とは、'79年12月に四国において行われたイベントに始まるデクの一連のソロ・パフォーマンスに形式上付けられた名称であり・・・このテープは、ビニール解体工場およびその周辺で行われた'80年3月16日～9月7日の間の演奏記録からの抜粋である。・・・」（デク）デクは現在香川県に住む、セーラー服を偏愛するパフォーマンス。彼の演奏にノスタルジー、アナクロニズム、ローカル色といった特徴を見出すことも可能だが、演奏の方位づけに無頓着なゴツァ煮的性格の方をむしろ注視すべきだろう。A-8のセミの鳴き声は無情だ。

◎5C-17《於自由音楽的集会》／いろいろ参加（60分）

主催者とか開催目的といったものはいまひとつはっきりしないのだが、とにかく1980年8月2日から3日にかけて京都大学の尚賢館というところで《Free Music Meeting》という催しがあり、全国から40余名の自称・他称・有名・無名フリー・ミュージシャンが参加し、様々な組み合わせでセッションを繰り返した(《Music Magazine》'80年10月号で竹田賢一氏が詳細をレポートしている)。このテープは著作権を尊重するというタマエから—というのはウソで、主に趣味とテープの長さの制約から、第五列(と便宜上名のっている我々)の含まれたセットに限って抜粋・編集したものである。あのビデオ(元《ウルトラ・ビデオ》)が普通っぽいピアノで参加しているがほとんど話題にならなかったのはどーしてですか。

◎5C-18《カッピング・テープ》、90分)

《Howling Music》／鈴木健雄

鈴木は《Vedda Music Workshop》(竹田賢一主催)の一員で、元々トランペットを演奏していたが、最近はバイオリン、テープレコーダー、ハウリング等を「演奏」することが多い(最近《Vedda》とは別に「ロック・バンド」を結成したとも聞く)。この作品集でもタイトルが示すように「ハウリング」を主要楽器として用いているが、別にかましくはない。それどころかたいへん心地良い。これは彼の「バランス感覚」によるところが大きいようだ。1980年録音。

《Man=Machine II》／Event=Accident 7711

《Event=Accident 7711》というのも実体のよくわからない(ない)不思議な寄合(7711は1977年11月結成を意味するらしい)。《第五列》に似たようなものかもしれない。ただ、このテープの場合は《7711》の一員小山博人(おそれおおくも、ヒロヒトと読む)のソロである。五列テープとしては珍しく「書かれた」作品、一種のカノンである。《Kraftwerk》の“Model”の旋律をモチーフにしているというのだが、一聴してそれとわかる人がいたら、その人はちょっとアレであろう、アレ。真面目な曲だが、演奏は飲み食いしながら割といいかげんに為されたらしい。1981年1月17日録音。

◎5C-EX《なっとう》(通称)《Improvised Works》(本名)／多数収録（90分）

第I期《第五列テープ》全13本中11本から各々の特徴的なテイクを約2作ずつ寄せ集めたダイジェスト版(残り2本のテープからは性格上の理由により収録していない)。オマケにアウトテイク・ミステイク等から6片を加えてサービス。批判的継承・発展的解消その他に役立つ色々な愚行のカタログである。我々はカセットレコーダーを持った原始人か？ 我々の音は身から出たサビか？ どうやらそのよーである。

◎Evan Parker+Burry Guy+John Stevens（90分）

パーカーはテナーだけを使っている。したがってあの独自のノンブレス奏法こそ聞かれないものの、ここでの三者のパワーはすばらしい。《The Trio》をホウフツさせるものがある。ガイのベースもインカスでのソロ・アルバムとは比較にならぬほど良い。パーカーの無調なスイング！（1979.7.13 at the Plough）

◎土取利行ソロ（90分）

彼のこの演奏で「パワーとは単に音の大きさではない」ということを我々は改めて知らされる。彼のそのユニークなヴォーカライゼーションも、聴衆をまきこんでのパーカッション・プレイも、よどみなくすきがない。聴衆は何度もアンコールを要求している。（1979 at la Chartreuse, Villeneuve-lèz-Avignon）

◎Michèle Collison-George（90分）

彼女は故ジャニス・ジョプリンの友人であったという。ここでは日本人を加えて様々なスタイルの「うた」を聴かせてくれる。アフリカ？日本？ジャンソン？ジャズ？ こだわりはないようだ。むしろ聴く立場の方が辛いかもしれない。パール・フィリップスとのデュオも聴ける。（1979.7.23 at Tinel, a Chartreuse）

◎Veryan Weston+Lol Coxhill（90分）

各々ソロがあってデュオに移る。コクスヒルのソプラノは以前と音が変わったようだ。不思議にシヴィアーに聴える。ウェストンのピアノは割にオーソドックスではあるが、2人のかけあいはなかなか楽しい。（1979.7.10 at London Musicians Collective）

◎Rutherford+Brötzmann+Kowald+Lovens（90分）

ファースト・ネームが全員Pで始まる(Paul, Peter, Peter, Paul)のは、何の暗号だろう。コヴァルトはベース以外にもいろいろやっている。ラザフォードが目立たないくらいだ。ブレッツマンの大砲サクスは相変わらず迫力。（1979.7.9 at 100 Club, London）

◎Roger Towner+Gary Todd+Nisel Coombes+Roger Smith（90分）

スミスのギターとクームスのヴァイオリンが目立っている。共にSMEのインカスでのレコーディングに参加していたが、当時の演奏同様、演奏自体は淡々としている。全体にこじんまりとしている。（1979.7.11 at Workers Music Association）

◎Derek Bailey+Frank Perry（90分）

ペリーは今までベイリーが共演してきたどのパーカッションリストとも異なった感覚を持っているといえそうだ。あるいは音質的に最もベイリーに近いものを持っているともいえるかもしれない。ここでの彼はベイリーの陰になり、暗い金属的な雰囲気をつくっている。（1979.7.14 at Soho Poly）

◎Joujouka Live（90分）

ジュジュカの音楽家たちの演奏がモロッコ以外の場所でなされたのは初めてのことである。オーネット・コールマンやブライアン・ジョーンズのアルバムでたびたびその興味深いアンサンブルが聴けたが、ここでも彼らは全く変りない儀式音楽を演奏している。（1979.7.21 at la Chartreuse）

◎《Un Jour Comme un Autre》／Vinko Glovokar（90分）

「別の日のような1日」、ここで歌っているのはおそらくダイヤモンド・ガラスであろう。プリベアード・ギターのような弦楽器、トロンボーン、発信音、電話のベル等、様々な音がよぎってゆく。タイトルはヒントになりえない。（録音データ不詳）

◎Anode/Cathode（46分）

「彼ら(=アノード/カソード)は少なくとも五人のアメリカ人—うち一人は日系人ともいわれる—から成るが、全員そろって演奏することはまれであり通常二、三人で、極端な場合は一人だけでテープをバックにギグを行っていたらしい」が、1977年頃までには事実上解散したと思われる。「かつてのジャーマン・ロックが有していたあの自虐的なまでの創造力を、我々は今全く異なる形でここに聴くだろう」(ピナコテカ・レコード PR-0 解説より)（録音データ不詳）

※これらの《ブートレグ・テープ》から抜粋したオムニバス・テープ《みそに》(通称)（60分）もある。

※第五列のテープは、第五列各代理人のもとにただ(1)空テープと(2)返信用切手が与えられたとき即ダビングされ貴客のもとに郵送されるという労働価値を無視した画期的非営利的草之根運動的の未来あふれる早い・安い・うまい・やんぐにばかり演奏の具現化です。お子様・奥様・愛人・天皇のお誕生日に贈ってびっくらさせたり、カラオケにして共演したり、いろんな他人にダビングのダビングしてばらまいてネズミ講してみるのもオツ。単に聞き流すというのもいいし、飽きたら消去して自分自身の五列テープにつくりなおすとかとか。後世の笑い草となるべくいろいろ工夫して遊んで下さいの事です。私たちは真面目な良心です。正直者が馬鹿をみるのは笑えぬ悲劇で内心ジクジたるものがありますです。

※第五列の代理人達・・・以下のいずれでも可(ただし、ブートレグの申し込み先は金野のみ)：

- |         |      |                      |               |
|---------|------|----------------------|---------------|
| 〒020    | 金野吉晃 | 盛岡市中野1-10-31         | ☎0196(52)4673 |
| 〒166    | 藤本和男 | 杉並区高円寺南4-34-22(高坂方)  | ☎03(318)2298  |
| 〒602    | 広重嘉之 | 京都市上京区一条御前通西入ル大東町103 | ☎075(463)7723 |
| 〒769-25 | 日笠慎也 | 香川県木田郡三木町井戸真行寺       | ☎08795(2)3353 |

人間はどこまで動物か

# 第五列テープ

